私が出会った人々

15

「相互扶助」の援助活動——菅波 茂 さん

「困ったときはお互いさま」というパートナーシップに根ざし、緊急医療支援活動を展開するAMDAの責任者。

外村民彦
とのむら　たみひこ／ジャーナリスト

フランスに「国境なき医師団」というNGO（非政府組織）がある。世界のどこかで戦乱や災害が起こったとき、すぐさま医師たちが飛び出して難民や被災者を助けるボランティア団体である。その活動の早さといい、規模の大きさといい、いつもニュースで聞くと、目を見張らされる。さすがにキリスト教国だと、感心もする。

イエス・キリストの教えから言って、貧しい人々、苦しむ人々のために手をさしのべる行為は自然発生的に出てくるもので、「仏教ではなかなかできないのはなぜだろう」と日本の仏教徒たちがもらすほどである。たしかに日本には、こうしたボランティア組織は生まれにくいのか、育ちにくいのかと、私自身、長いあいだ歯がゆく思ってきたものだ。

若い日本兵の戦死の写真

ところが、ソマリアとかカンボジア、ルワンダなどの内戦による多くの難民が出たとき、日本から緊急医療支援の団体が医師や看護婦を派遣したというニュースが、ひんぱんに出るようになった。きまって「AMDA（アムダ）」という名称

である。

九四年秋、私は旧ユーゴの一国のクロアチアへ行き、難民救援活動をかいま見た。そこではJEN（日本緊急NGO）という組織が首都ザグレブに事務所をおいて、たとえば東部のオシェクという都市周辺では、集団収容センター特別老人施設改修や子ども劇場公演支援、総合病院医療器具支援をするなど、各地に二十余のプロジェクトを展開していた。このJENの中に「AMDA」の名前もあった。

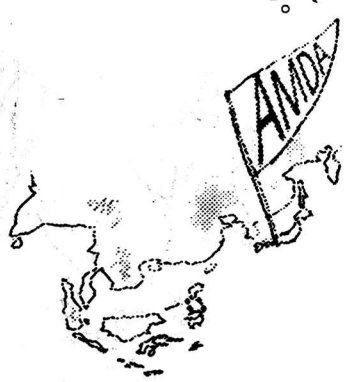
AMDAっていったい何だろう。私は興味を持ち、岡山にある本部を訪れて、いろいろと聞いてみた。

AMDAは「THE ASSOCIATION OF MEDICAL DOCTORS OF ASIA」の略で、「アジア医師連絡協議会」。

今から一二年前の八四年十二月に設立され、現在アジア一五か国の支部の医師、看護婦九〇〇人が加わっている。九一年の湾岸戦争直後の、イラン国内のクルド難民支援医療プロジェクトをはじめ、バングラデシュ、カンボジア、ソマリア、モザンビーク、旧ユーゴ、ルワンダ……へと医師、看護婦を派遣してきた。また、フィリピンのピナツボ火山や、ネパールの洪水、サハリン大地震、インドネシア大地震、阪神大震災、中国雲南省の地震などの被災民の救援にかけつけている。

その責任者は菅波茂（すがなみしげる）さんである。岡山市内に医院を持つ内科医師。四十九歳。どんな人なのだろうか。私がこの菅波さんに初めて会ったのは、阪神大震災一周年のシンポジウムが東京で開かれたときだった。会合のあと夕食をともにしながら、いろいろと話を聞いたのだが、大変気さくにあけっぴろげに話すお医者さんだった。

なぜAMDAをつくるようになったのか、何か駆り立てられる深い理由があったのではないかと尋ねてみると、



「そう、高校二年でした。祖父の蔵書の中にあった『太平洋戦争写真集』を見たのです。その中に、日本の若い兵隊がニューギニアの海岸の浅瀬で戦死している写真があって、ショックを受けました。これです、私の原点は」

自分と同じ年くらいの兵士は、安らかな顔だったが、なぜ南の島の浜辺で死ななければならなかったのか、金縛りにあったように、その写真を見つめつづけたという。こんなむごい死に方をさせる戦争を起こしてはならない。アジアでは、日本の兵隊だけでなく、連合軍や現地の人々も、多くの犠牲者を出した。アジアにこだわっていこう……。十代後半の多感な菅波さんは、そう思ったそうだ。

「それと、高校三年のときに父が、シュヴァイツァーもいいなあと言ったことが、私を医師の道に進ませました」

シュヴァイツァーと言えば、ドイツの神学者、哲学者、オルガニスト、医師のアルベルト・シュヴァイツァー（一八七五～一九六五）のこと。アフリカの人々の病苦を知って、三十歳から医学を修め、仏領赤道アフリカ（今のガボン）のランバレーネに病院を建て、妻とともにアフリカに生涯をささげた人である。

アジアの医師と積極的に交流

そのまま岡山大学医学部に進んだ。その四年生時代の一九六九年、ベトナム戦争のさなか、国内では大学紛争が吹き荒れていたころ、アジア・中近東の一〇か国を放浪のひとり旅をした。タイ、ビルマ、インド、パキスタン、アフガニスタン、イラン、クウェート、カンボジア、シンガポール、香港。各地で、貧困や病気との戦いを広く見聞し、

自分自身も病気になって治療を受けた。

「とくにインドの救らいセンターでは三か月滞在して、国際医療協力の現場を見ました」

その延長として、卒業後の七二年以来、三次にわたって岡山大学クワイ河医学踏査隊を組んで台湾、タイ、ネパール、インドに出かけたり、七八年以後は七次にわたってアジア伝統医学調査隊が、イラン、インド、タイ、フィリピン、ビルマ、インドネシア、ポリネシア、中国などへ出かけた。

七九年から八四年まで毎年、アジア医学生国際会議をタイやマレーシア、シンガポールなどで開き、アジアの医師や医学生たちとのネットワークを広げて、ＡＭＤＡへとつながっていった。

たとえば九三年七月二十一日の朝、ネパール中東部に発生した大洪水のときの救援記録を見ると――

首都カトマンズの南西二〇キロにある水力発電所ダムが決壊、ふだんの水位より一〇メートル以上も高い濁流が平野に流れ出た。遠因は森林の伐採で山肌が露出し、保水力をなくしたためらしい。とにかく五三万人が被災、死者は二〇〇〇人を超える被害となった。

ネパール支部から岡山の本部に「救援たのむ」と、ファクスが入ったのが七月二十三日。翌日、救援開始を決め、三十日までに二人の医師が先遣隊として出発、八月六日には一二人が現地に入った。八日から二十四日まで診療活動をしたのだが、最初は一日五〇人くらいの患者が、日ごとにふえて毎日三〇〇人ほどにもなった。大半は下痢などの胃腸の病気だった。

その間にも豪雨がつづき、診療の現場への往復は、腰まで水につかるときもあった。裕福な家の広い軒下に寝起きしたり、ふろはないので、下着をつけたまま井戸水で体を洗ったり。救援チームの苦労はどこでも同じだが、筆舌に尽くせないものであることがよくわかる。

菅波さんが話した中でとくに私の関心を引いたのは、キリスト教国による救援活動と日本の救援活動との、意識の違いについてだった。

「キリスト教国の欧米の人たちの活動の意識には〝人権思想〟があります。そこでは、助ける側と助けられる側との間に、はっきり区別があるように思います。助けられる側のプライドは無視されがち。ところが日本人の場合の意識は〝相互扶助〟の考え方です。〝困ったときはお互いさま〟というパートナーシップの気持ち。だから救援するという意識は、魂の問題としてでなく、生活の問題として取り組んでいます。それだと宗教の違いも乗り越えられる。この相互扶助思想は、二十一世紀の価値観の多様性に対処できる思想だと思います」

ＡＭＤＡの組織の中にはすべての宗教が含まれているという。インドネシア、バングラデシュ、パキスタンのイスラム教、インドやネパールのヒンズー教、タイ、カンボジアの仏教、韓国や台湾の仏教、フィリピンのキリスト教、そして日本の神道。また、出かける先々も、たとえばミャンマー（ビルマ）難民だったロヒャンギやソマリア難民はイスラム教であり、ルワンダ難民はキリスト教。それぞれの難民生活の中で、宗教的な部分は大きい。

「アジアのヒューマニズムを」

「ＡＭＤＡには宗教的なタブーはありません。欧米のＮ

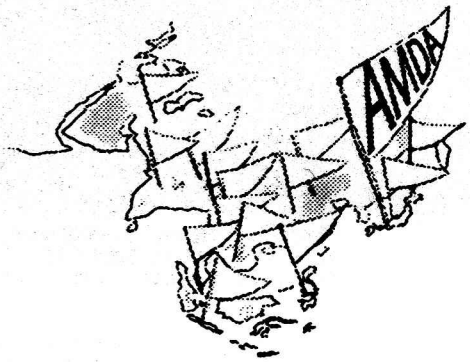
GOはキリスト教を背景にしているので、イスラム社会では活動のしにくさがあるのではないか。しかし多くの宗教をかかえたAMDAは、超宗教とも言えます」

もちろん、〝人権思想〟を否定してはいない。むしろ人権思想の中心にあるヒューマニズムは、救援活動の絶対的な条件だと、菅波さんは言う。そのうえで、〝相互扶助思想〟に根ざした「アジアのヒューマニズム」が生まれてくるのではないかと期待を抱いている。

菅波さんがなぜこうした考えを持てるようになったのかというと、学生時代に岡山市内の臨済宗の寺に下宿して、座禅を組んだりしたことが影響しているようだ。

「そこにいる友人から、来ないかと言われ、一年間、一緒に修行のようなことをしたわけです。だから、私には宗教アレルギーはありません。どの宗教とも協力できます。旧ユーゴにも中立の立場で入っていけたのも、こちら側に宗教的色合いがなかったからなのですよ」

阪神大震災では、行政の救援活動の立ち遅れがマスコミで批判されたが、



「いえ、大地震などのとき最初の七二時間は、役所の人たちも被災したり交通機関がだめだったりで、行政の活動はそう期待はできない。ですからその七二時間こそがボランティアの大事なときです」

と、明快だった。

AMDAの年間三億から四億円にも及ぶ活動費は、国連から三分の一、郵政省の国際ボランティア貯金、外務省のODA（政府開発援助）関係が三分の一、そして一般の寄付金三分の一となっている。

体がいくつあっても足りない過酷な仕事のはずだ。しかし菅波さんは言った。

「活動に取り組むのは〝遊び心〟ですね。何でもそうだと思いますが、本気でやっていたらダウンしてしまいますよ。〝ああ、むだ〟とひやかされることもありますが」

そのゆとりが、救援の仕事に抵抗なく当たっていられるのかもしれない。

菅波さんが忙しい分、耳鼻科医師の妻知子（ともこ）さんが、医院の経営を切り盛りしているから、安心だそうである。Ω